様式３

会　　議　　録

<table>
<tr><td colspan="2">会議名
（審議会等名）</td><td colspan="3">美術館検討委員会(第３回)</td></tr>
<tr><td colspan="2">事務局
（担当課）</td><td colspan="3">市民活力推進部文化国際課　電話０４２－７６９－８２０２(直通)</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td colspan="3">平成２０年５月２２日（木）　１６時００分～１８時００分</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td colspan="3">相模原市民ギャラリー　会議室</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出席者</td><td>委　員</td><td colspan="3">１１人（別紙のとおり）</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="3">０人</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="3">５人（市民活力推進部長、文化国際課長、他３人）</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開の可否</td><td>■可　□不可　□一部不可</td><td>傍聴者数</td><td>１人</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開不可・一部不可の場合は、その理由</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="2">会議次第</td><td colspan="3">１　開　会
２　議　題
(1)相模原市の美術館は、何を目指す美術館なのか。
(2)相模原市の美術館は、何をする美術館なのか。
３　その他
４　閉　会</td></tr>
</table>

審　議　経　過

主な内容は次のとおり。（○は委員の発言、●は事務局の発言）

１　開　会

相模原市市民活力推進部長あいさつ

２　議　題

（１）相模原市の美術館は、何を目指す美術館なのか。

※資料別紙１～４等(会議以前に委員に送付済み)及びについて、事務局から説明を行った。また、平成２０年３月２１日の平成１９年度第３回相模原市民ギャラリー運営協議会において、美術館検討委員会へ意見を伝えたい旨の申し出があったため、同運営協議会の議事録を資料として配布した後、議案に基づいて各委員で意見交換を行った。

○　「資料１　相模原市立美術館の目指すこと（案)」(以下、「資料１」という。）について、項目が多岐にわたっているので、テーマを決めて討議を進めたほうが良いのではないか。

○　「資料１」の各項目は、まだ流動的なものとして、固定しないほうが良い。

○　本日、検討委員会で出た発言をもとに、再度資料を作成し、次回以降、細部を含めた討議に入りたい。

○　美術館の建設予定地について、多摩美と造形大が橋本からすぐの距離にあるが、橋本駅の周辺は美大生の会話が聞こえてくるなど、大変雰囲気が良い。住民も美術館に期待していると思う。

○　美大生が橋本を多く利用しており、橋本で美大生がまちに良い印象を与えているとことは喜ばしい。

●　橋本に美術館を作ることについて、市民の中には唐突な印象を持ったり、疑問を呈する向きもあろうかと思うが、橋本に美術館を作ることについては、必然性があると考えている。橋本は多摩美、造形大が近くにあり、女子美についても、相模線で２０分弱という距離にある。３つの美大が集中する地区は、全国でも他に無い。卒業生まで含めて考えれば、橋本は、国内で最も若い作家が集中しているまちだと言える。

○　美術館建設予定地の位置を考えると、建設された後では、商業施設に遮られて見えなくなってしまう。インパクトの点から考えると、遠くから眺めてみても、「何だろう」と思わせるような美術館であってほしい。

○　立地から討議を進めると、どうしても美術館の「建物」の話になる。相模原市の地域全体を捉えた中で、美術館のあり方について考えたい。

○　「資料１」にある「美術に直接触れる美術館」に同感できる。美術に触れる環境としては、「自然とのふれあい」も考えるべきだ。自然環境の豊かな場所や、都市

部では商店街の協力も得るなどして、市内のあらゆる場所が美術館になっていけばよい。

○　１０年ほど前から、視覚障害者のために、作品に触れても良いという展示企画が増えている。「今までできなかった体験をすることができる展示」、こういった企画は美術館の大きなＰＲになる。

○　近年、北海道の旭山動物園が注目されている。経営難により展示内容を大きく変えた結果、「行動展示」を取り入れた。動物たちの生態を生き生きと、生々しく見せることに成功し、入館者数の増につながった。美術館・博物館はサービス業であり、来館者へのサービスのために、どのような展示を行うかが重要だ。

○　行動展示と内覧展示は対立する概念のように思われるが、相反するものではない。

○　ワークショップ等も広い意味で行動展示だ。大きな概念で捉える必要がある。

○　先ほどの事務局の資料の中に「デジタルで変わる美術館」という新聞記事があったが、デジタルによる展示も、展示物にいかにアプローチするかという点で、これも作品に「美術に触れる」ことと捉えて良いのではないか。

○　市内の桜台小学校の校内には「桜台美術館」を開設し、児童や地域の団体、個人の作品を展示し、鑑賞教育並びに地域文化の拠点として活用を図っている。実際に来館者が触って楽しめる機会があるとよい。

○　市内の全小学校共同で毎年行っている「さがみ風っこ展」は、悪天候の年であっても、３日間で約１２万人の集客がある。子供が関心を持つ展示であれば、子供たちは積極的に参加する。子供が一回見て、また行きたい気にさせるような、参加して楽しい企画、子供心をくすぐる企画が必要だと思う。

○　これからの美術館は、企画・運営力が問われている。市民に、「相模原市で何かおもしろいことが起きている」と言わせるような、市民が誇れるような企画ができればいい。

○　ハード以外に、作家の支援などソフトの充実が不可欠だ。美術館には目玉が必要だ。

●　美大生には発表・活躍の場が必要だ。しかし、ただ単に美大生に活躍の場を与えても来場者が訪れるか。ゲームセンター的に人を集められるような面白さを美術館に取り入れることも必要。経済的に、美術館の事業だけで単純に黒字になることは難しいが、美術館があることでまちが潤うのであれば美術館の重要性が増す。

○　市民に、「美術館に行けば面白い」と思わせることは大切。ただし無秩序では困る。美術館では何をしても良いわけではない。来館者を正しい鑑賞態度に導くことも美術館教育だ。

○　市が作成した「資料１」については、各項目とも妥当な内容であり、これからの美術館が踏まえなくてはならないことだ。しかし、「相模原市の美術館」として、どう特色を出していくかが問題だ。

○　「資料１」は、あまりに範囲が広すぎて分かりにくい。①美術館の中で行うこと、②美術館の外で行うこと、と分けて考えてみてはどうか。建設予定地からすると、あまり大きな美術館は建てられない。アートセンター的な役割を目指し、バランスよく、建物の内と外での活動を行うのが良い。とはいっても、美術館には人が集まるほうが良い。人が集まればこそ、センターとしての役割が生きてくる。

○　いわゆる「美術館」でなく、アートセンター的な役割が必要だ。

○　本日配布された、市博物館発行の「どこでも博物館」という資料を見ると、市博物館の概念図があり、博物館がコア施設となって、他の様々な施設と連携し、包括している。市立美術館もこのような形態を取れればいいのではないか。

○　城山に文化施設が作られるということだが、美術館との連携はどうなるのか。これから作られる施設については、美術館との連携について視野に入れてもらいたい。

○　せんだいメディアテークという施設がある。図書館を出発点とした施設であり、美術館以外の範囲までカバーしている。作品を創作する場所を提供しているが、高度なものでなく、誰でも参加できる。

○　例えば毎年、高校の文系サークルの全国大会が場所を変えて開かれている。高校生らの美術や音楽、運動などの部活動にはそれぞれの施設が存在するが、日常、広く文系や理系サークルの発表の場は、たとえば学校単位ごとの文化祭などでしかない。ロボコンなどの例もあり、美術に限定せず、若者が参加、集える場所となることも、文化施設的美術館の一つのあり方として想定できるのではないか。

○　せんだいメディアテークについては、美術分野と図書館分野とで互いに主張する部分があり、良い緊張感を持っているようだ。金沢芸術村ものすごく活性化している。施設でアトリエを貸しており、基本的に利用者の自主管理で、コストが安い。東京からわざわざアトリエを利用しに行く人がいる。日本はまだまだアトリエが不便。たったこれだけのことでも、作家をサポートし、イメージアップに効果を上げている。相模原市でもちょっとした工夫で、できることがあるはずだ。

○　学校の空き教室を利用して事業を行うこともできそうだ。

○　市内にある大きな企業に土地を提供してもらってアーティストインレジデンスなどの活動が可能にならないか。アトリエと宿泊施設は同じ場所でなくて、別に用意してもいい。

○　桜台小学校は空き教室に展示をしているが、市内の小中学校の空き教室を利用してはどうか。文化活動に使ってもいい。

○　世田谷では廃校跡地再生プロジェクトとして「世田谷ものづくり学校」をやっている。組織を株式会社化して、スクール事業（スクーリング、公開講座などの開設、人材育成・研修）　や、文化・芸術振興事業のほか様々な事業を行っている。

○　以前に、企業から、大学の美術館で展示したいという申し入れがあった。大学と

しては断ったが、市の美術館の場合は、市内企業の育成にもなるので、企業が美術館事業に参加することも考えていいのではないか。 ○　美術品の収蔵について、市ゆかりの作家の収集は必要だが、それにこだわってはいけない。ただ集めるのではなく、「良いもの」を収蔵すること大切。 ○　コレクションについては量より質をとりたい。収蔵品は、展示をするのが目的だ。優れた収蔵が、優れた展示につながる。 ○　作品の収集については、何でも集めれば良いというものではない。収集には基準を設けるべきだ。刀でも焼き物も何でも美術品として収蔵してしまうと、収蔵庫はすぐにいっぱいになる。次回までに何を美術館で扱うのか考えたほうが良い。 ○　相模原市の美術館は、美術品をただ集めて展示するだけではない、「何かメッセージを発信していく美術館」であってほしい。来館者サービスはもはや当たり前だ。重要なのは、相模原市の美術館が「何を発信していくか」である。中心となる目標を「相模原市の美術を作っていく美術館」にしてはどうか。 ○　市が個性ある美術館を作るには、「市民を中心にした美術館」であるべきだ。従来の美術館の壁を打ち破り、市内の美術団体に活躍してもらい、市民には良い作品を目にしてもらい、学生には勉強してもらう。そういった美術館が必要だ。 ○　地方の美術館は、地域に貢献する部分と、世界に目を向ける国際性が必要。地域の美術を尊重しつつ、若い作家については海外を含めた市内外の作家を対象に事業を行うべき。世田谷美術館は、「日常を美術にする。活性化していく」ということを考えている。具体的に日常生活の中で美術や美術館を考えていく。美術館は、「美術が日常の中で果たす役割」について、担っていく必要がある。相模原市立美術館でも可能であると思う。 ○　学校教育なども含めて、美術館が相模原市の美術の先導役になればよい。 ○　美術をまちの中で普遍化させていくためには、日常に目を向けることも大切。美術館で日常における美術をテーマにした事業を展開してはどうか。 ○　相模原市は若い都市だ。相模原市が目指すのは、「若さとチャレンジ」。チャレンジは若さにつながる。革新性、やる気のある美術館にしてほしい。しかし、若さといっても年齢は関係ない。高齢者も対象にして欲しい。 ○　美術館を考えるとき、国際的な視点が必要だ。 ○　地域にありながら、世界に目を向ける必要がある。美術館がこれから目指すものを、そういった視点で考えて行きたい。 ○　「資料１」は、表としては良くまとまっているが、最も根本的な「美術館」像が見えない。美術館に「何ができるか」について多く挙げられているが、「本格的な美術館」として「何を中心として行うか」という視点で美術館を考えた上で、他の事業をあわせて考えていくべきだ。中規模の美術館であり、都心の美術館とは異なるが、横須賀市美術館のように丹念な仕事をしていけば、グローバルな事業

展開も可能だ。まずは美術館の全体像が必要だと思う。

○　美術館の基盤について、収蔵・企画展といった核になる事業を持たないと中心が無くなる。「展覧会」を事業の中心にして活動すべき。対象となる来館者の層を子供や高齢者などにした場合でも、美術館としてのメッセージを発信していくことはできる。

○　北欧では美術が人生の重要な部分を占めるのに対して、日本では美術の重要性が認識されていない。美術館は、「美術の重要性」を正しく伝えていかなければならない。

○　現在、市民ギャラリーが果たしている美術館的な役割と、これから作る美術館の関係について、市の考えを聞きたい。

●　相模原市民ギャラリーは、現在相模原市唯一の美術施設だ。市民ギャラリーでは「成川美術館コレクション展」等の企画展示の他、エキシビションプログラム（学生企画による学生作家の展示会）など、若手作家の育成やワークショップ、アウトリーチといった、まさに美術館的な事業を行っている。これら事業を更に昇華していけば、美術館の事業につながっていくものと考えている。

●　作家がアートで生活できる環境を作ると同時に、美術館の基礎となる収蔵と展示についてしっかりと行うことが大切だと考えている。

○　美術館の事業は、学芸員の力量によっているが、学芸員は３Ｋと呼ばれるほど労働環境が悪い。学芸員が力を発揮できるような環境が必要。待遇を良くするためには経済力が不可欠。今後、「いかに運営・経営面で美術館を維持するか」について考える必要がある。森美術館の例で言えば、森美術館がビルの最上階にある理由は展望台に来る客を取り込むためであり、美術館の入場料も展望台の入場料に含まれている。相模原市の美術館の隣に、ショッピングセンターがあるからといって、客が自動的に来るわけではない。

○　学芸員は忙しい。疲れ果てて無理をしながらやっているのが現状だ。美術館は心ある学芸員の努力で成り立っている。負担を軽くしてやって、その上で事業の広がりを持たせることも大切。学芸と教育の比率を考え、各部門の専門性を高めることなどにより、ニーズに対する対応が可能になっていく。美術館の事業の展開には難しい面が多い。

○　美術館が「何を目指すか」という部分にかかってくる。魅力的な展覧会を開くのも美術館の使命だが、それ以外の部分も重要だということを再認識していくことが必要。美術館を奴隷化した学芸員の集まりにしてはいけない。

○　毎年「風っこ展」を開いているが、「風っこ展」を支えているのは美術科の教員の熱意だ。美術科の教員には熱意がある。これから退職していく美術科の教員を美術館運営に役立てて欲しい。

○　そろそろ時間だが、「相模原市の美術館は何をする美術館なのか」については討議

に入れなかった。今回の討議内容を事務局に取りまとめてもらい、次回に討議したいと思う。

○　今日のまとめとして、議論がどこまで進んだのか確認したいが。

○　今回話し合われた内容について、ここで総括するのは難しい。今回の討議内容を事務局にまとめてもらい、討議を進めていくこととしたい。

○　次回の討議までまた２か月、間が空いてしまうので、話が元に戻ってしまうのが心配だ。

●　本日の討議内容については、議事録を作成してお送りする。ご意見があれば早めにメール等で事務局に意見を寄せていただき、次回の資料作成に反映させたい。

●　資料のまとめ方についても、委員長、副委員長にご相談させていただきながら進めて行きたい。

●　今回のお話を伺い、相模原市の美術館像を考えると、「美術館らしい美術館」ということに尽きるのではないか。美術館として、本来行うべきことを事業の中心に据えていかなければならない。奇をてらった事業ばかりを挙げていっても、市民に理解は得られない。

○　美術の現場を見ると、アートの範囲の広がりは目覚しいものがあり、未分化の部分が多い。「資料１」に「開かれた美術館」と書かれた部分があるが、あまり対象を広げてしまうと際限が無くなる。どこまでを対象としていいのかが難しい。

○　「美術館らしい美術館像」を考えるにあたり、「先進的な美術館像」と比較しながら検討しても良い。「美術館らしい美術館」と、「先進的な美術館」は共存できるのか、相容れないものなのかについても考えることができる。検討項目がより明確になり、外部への説明もやりやすいのではないか。

●　市美術館の「概念図」を作成するという意見もあったので、「相模原市の美術館像」について、次回までに資料を作成したい。また、美術館運営経費について資料を収集中だが、まだ委員にお見せできる状況ではない。資料が整い次第提供することとしたい。

○この続きは次回に持ち越したい。その他、何かあるか。

３　その他

第４回検討委員会の日程調整を行い、７月２４日（木）１４：００からおこなうこととなった。（開催場所について未定。）

美術館検討委員会委員出欠席名簿

	氏　　名	所　属　等	備　　考	出欠席
1	生　嶋　な　ぎ	公募委員		出席
2	石　野　克　彦	公募委員		出席
3	稲　木　吉　一	女子美術大学	教　授	出席
4	上　條　陽　子	市民の美術館を考える会	代　表	出席
5	清　水　哲　朗	東京造形大学	教　授	出席
6	陶　山　定　人	相模原芸術家協会	会　長	出席
7	高　橋　直　裕	世田谷美術館	学芸員	出席
8	原　田　　光	元横須賀美術館副館長		出席
9	古　田　　亮	東京藝術大学	准教授	出席
10	松　本　美代子	市立緑ヶ丘中学校	校　長	出席
11	森　脇　裕　之	多摩美術大学	准教授	出席